

◎ 寺子屋サロン：毎月最終土曜日 15時半～17時

10/28・12/23：テー・マフリーの座談形式で開催しています。  
10/28は、本堂のお仏具のお磨きをします。

◎ 死別のかいの集い：13時～15時

・夫を亡くした方：毎月第1土曜日(11/4・12/2・1/6)

・自死遺族の方：毎月最終土曜日(10/28・11/25・12/23)  
当事者の方々と僧侶(超覚寺住職)との死別のかいの集いです。

◎ 体操教室・整体教室・寺ヨガ教室・よろず相談会  
毎月開催していますが、日にちを固定していないので、境内墓地側の掲示板をご覧いただけ、超覚寺までお問い合わせください。

◇ 寺院護持費(墓地管理費)について

例年 この時期にお納めいたく方が多く、玄関が混み合います。お振り込みもどうぞご利用ください。

【ゆうちょ銀行 15190-55770601】

他金融機関からゆうちょ銀行へ振り込まれる際は、次のように入力してください。

【名義】チヨウカクジ

【店名】五一八(読み ゴイチハチ)

【店番】518(普通預金) 5577060

◇ 報告・連絡・“僧”談

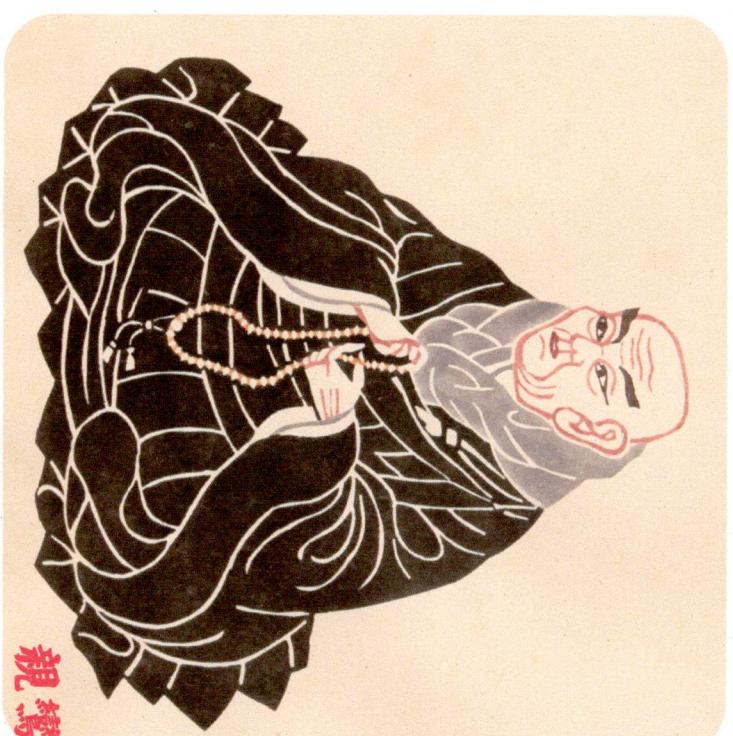
・今年の広島カープは、大方の解説者の最下位予想を覆す奮闘ぶりで、CSの地元開催を掛けた最終試合まで盛り上りました。最後の最後に巨人がDeNAに勝ったので、まだマツダスタジアムで試合が観られます。さあ我らの声援でチームを甲子園に送り届けましょう。

・サンフレッチェ広島の新しいサッカースタジアムも全貌が見えてきました。来年は、野球とサッカーをハシゴして観戦出来そうですね。

発行人：超覚寺住職 釈隆恩(和田隆彦) (\*— —)人 ～合掌

## 2023年11月報恩講 超覚寺報 第59号

# 【ノヘ丁堀だより】



林驚山 憶西院 超覚寺

親鸞聖人

RIN-0-ZAN OKU-ZEI-IN CHO-KAKU-JI  
〔since 14th century 1619, 1619, 1619, 1619〕  
〒730-0013 広島県広島市中区ハーディング 5-2

Tel : 082-221-1234 ; 090-9999-3113

Mail : wada@namuamidabutsu.com

HP : <http://www.namuamidabutsu.com>  
<http://mytera.jp/tera/48chokakuji>

# 超覚寺 冬の行事のお知らせ

慈光のもと、平素は様々にお世話になっておりのこと、ありがとうございます。  
さて、下記の通り法要・法座を勤修いたしますので、ご参詣くださいますよう、ご案内申し上げます。<――>

## ◎ 報恩講法要



11月3日(金・祝)

10時～

勤行：住職

10時30分～12時(休憩有)

法話・歌唱：大西貴浩師(声楽家・テノール歌手)

13時～

勤行：市内寺院住職

14時頃～15時 大西師と住職の対談

この度は珍しい大谷派僧侶の方をお招きします。大西貴浩先生は、上智大学文学部社会学科を卒業後、一般企業での勤務を経て、日本オペラ協会オペラ歌手育成部第31期修了。藤原歌劇団員を勤めてから、現在フリーで活動されています。

2014年12月、熊野本宮大社での奉納演奏を皮切りに、伊勢神

宮内宮、出雲大社、伏見稻荷大社、春日大社、日吉大社、上賀茂神社、下鴨神社、住吉大社、金刀比羅宮、大神神社、椿大神社、高

千穂神社、鵜戸神宮など全国数十社で日本のうたの奉納演奏を行われました。童謡・唱歌から芸術歌唱曲まで幅広く日本歌曲を専門とし、美しい日本語の発音、言葉の一つ一つがクリアに聞き取れる歌唱は、声楽界においても唯一無二と評判です。

今回は、勤行本に載っている仏教讃歌をリクエストしています。

また、上智大学グリーフケア研究所認定臨床傾聴士の資格もお持ちなので、午後はグリーフケアのことを対談したいと考えています。

## ◎ 終活セミナー～心豊かな終活を一緒に考えてみませんか～ 12月9日(土) 13時30分～15時

あなたは自分自身に「もしも」のことがあった時、大切な人に何を残したいですか？ 今後について不安や悩みはありませんか？ 残しておきたいものや伝えておきたい想いを「かたち」にすることは、今だからできること。人生の棚卸しをすることで、これから的人生をより自らしく生きる。それが『終活』です。

コロナ禍も落ち着いた今年、4年振りに超覚寺門信徒の行政書士の岡村奈七江さんを招き、終活の「あれこれ」をお教えいただきます。どうぞ万障お繰り合わせの上ご参加ください。

## ◎ 2024年修正会法要

1月1日(月・祝) 6時～8時～10時～12時～

一年の計は元旦にあり。「今年もお念仏の道を歩ませて頂きます」と阿弥陀様にご挨拶申し上げましよう。住職が約10分ほど勤行・法話を勤めますので、新年どうぞ本堂までお参りください。

門松や冥土の旅の一里塚めでたくもありめてたくもなし(一休禅師)

## ◎ 超覚寺の由来版

開基400周年記念に作成した「来歴」を基に由来版を製作

し、寺門の右扉に設置しました。

幟町小学校生徒の町探検で、「なぜこの場所にお寺があるのか？」をよく訊かれるので、多くの一般の方々も不思議に思われているかと思われるかもしれません。

それにお応えできれば嬉しいなあと思います。



・9月2・3日(土・日)【広島市内の大谷派龍善寺様】

「後生の一大事を考えよう」という講題のもと、お取り次ぎさせていただきました。死の仮想体験をするワークショップも行いましたが、約70名の人数は初めてのこと。通常とは違う方法を試しましたが、そう問題なく出来ました。

伝えるべきものは変わりませんが、現代的な伝える術を磨き続けるべく伝えたい人に伝わっていきませんね。



・9月23日(土)【秋季彼岸会】

今年の秋季彼岸会、御門徒方36名がお参りください、おかげ様で無事勤まりました。今回の法話も、滋賀県の瓜生崇師にご依頼しました。法然上人や親鸞聖人の人物像に関するお話で、親鸞聖人をより好きになれる内容を楽しく拝聴しました。

今年はコロナ禍も落ち着いたので、おはぎも多めに手配しましたが、

ほとんど余りませんでした。ありがとうございました。



★ 報恩講とは

浄土真宗の門徒(信仰者)が1年間で最も大切にする仏事です。京都の東本願寺(真宗本廟)では毎年11月21日から28日まで勤められますし、全国の真宗大谷派の別院や寺院でも年に一度、日時を定めて勤められています。

“報恩講とは何か”を訪ねるキーワードに「11月28日」があります。宗祖親鸞聖人は1262(弘長2)年11月28日に90歳のご生涯を終えられました。親鸞聖人が亡くなられた祥月命日に仏法を聞く集いを開いて、自らの信仰を確かめ学び直そうという人たちが集まりました。この集いを「講」といいます。その源を訪ねれば、親鸞聖人自身が師・法然上人のご命日に人々と寄り合い、仏法を聞き、お勤めをし、語り合つておられたことにあるといえます。

第2のキーワードは「報恩」です。恩に報いる、恩を報らせるとも読みましょう。私たちが生きていくうえには親の恩や師の恩など、いろいろなご恩があります。それぞれ大切なことです。報恩講の恩は、私たちを救ってくださる仏さま(如来大悲)、そして私たちに先だって生きていかれた方々の勤めによって念仏の教えに遇い、一人ひとりが生きる依り処を教えていただいたご恩のことです。そのご恩に報い、先達の後に続いて、いつのどこの誰にでもかけられた仏さまからの「本当の願い」を共に聞いてまいりましょうという願いが、報恩講という仏事には託されているのです。

その報恩講は、人々が寄り合い、お齋をいただくなど、共にふれ合いつつ聞法する場として、今日まで脈々と勤められてきています。超覚寺では、毎年11月の第1土曜日にお勤めし、コロナ禍も落ち着いた今年は、お齋も復活する予定です。

## ☆ 終活を考える

近年終活がもてはやされているが、終活を進める時的重要なポイントは「死をイメージ」することだ。仏教ではお釈迦様が生老病死という四つの苦しみを説かれた。生きることそのものが苦しみであり、老いや病気も苦しみ、そして一切皆苦(=思い通りにならない)の世の中を生きてきた最期には、死に臨む苦しみがある。老いや病気は個人差があるため苦しみの程度もバラつきがあるが、誰もが免れられない死に臨む苦しみを推し量ることは想像するに余りある。死んだ後に生き返った人は誰もいないので、死の苦しみを生きながらにして理解することは不可能だが、人生で培ってきたありとあらゆるものを手放していくかなければならぬ心の境地はいかばかりだろうか。

寿命が伸び、死に場所が自宅から病院に移り、現代社会は日常生活において死に触れる機会が極端に減った。それは死について考える機会を強制的にでも作り出さないと、死に臨む心構えや準備が全く整わず、死にゆく本人や遺された家族にとっても望ましくない最期を迎えることにつながる。だからこそ、望ましい最期を考える「終活」が大切なだ。あなたも、あなたの家族もいつかは必ず死ぬという真理。この真理を周囲に理解してもらう積極的な行動こそ、現代における利他行と言える。近年は新型コロナウイルス感染症の大流行によって誰もが死を身近に感じたはずであり、その記憶が残っているうちに終活を始めるのはとても良いタイミングだと思われる。

「終活」とは、具体的に介護、葬儀、お墓、財産などを、一つひとつ自分と家族などをイメージして考えていくこと。書籍・雑誌・インターネット等から情報収集し、時にはセミナーに出て専門家の話を聞く。考えた内容をエンディングノートとしてまとめることは、望んだ終活を家族に成し遂げてもらうためにも必要と言えるだろう。

それでは「死をイメージする」する最適な方法はなんだろうか。「供養」もそうだと考へている。死について、ただ頭の中だけで考えたとしても現実感と手がかりに欠け、答えの見えない悶々とした堂々巡りになるが、「供養」は実践が伴う現実の営みであるからだ。法事であれば、仏様となつた大切な家族に手を合わせることを通じて、死というものについて考えをめぐらす時間になる。

死について学ぶ最良の教材は、他者(三人称)の死だ。一人称(自分)の死を考えるには、三人称(身近な人)の死が最大の手がかりになる。古来、私たち日本人は故人を忘れない「供養」という営みを通じて、自らの死、そして人生を見つめ直す機会としてきた。自分にとって大切な存在であるご先祖や家族を

↙ 見つめ直す機会としてきた。自分にとって大切な存在である先祖や家族を供養することで、「自分もいつか死ぬ」という真理を自らの死生観に強く植え付けてきたことが、日本の供養文化の果たした役割と言えよう。

しかし、現代社会では日常生活における供養という営みの存在感が希薄化しつつある。家族形態の単身化が進み、生活空間からはお仏壇がなくなり、葬儀も家族葬など小規模化しているので、街の風景に葬儀会場への順路を知らせる立て看板を見ることが珍しくなった。

比較的身近だと思っていた知人の死も、既に葬儀が終わったことを事後に知らされたり、事前に知ったとしても厳に家族のみということで参列を断られたりするケースも増えてきた。簡素化が進む死の取り扱いを見ると、はたして人生をその人なりに生き切った尊厳に見合っているのか疑問に思わずざるを得ないだろう。

他者の死に対する向き合い方は、自分の死への向き合い方の写し鏡である。三世代同居を通じて老いや死への向き合い方が家族の中で自然と引き継がれることができ難い中、死の作法を能動的に学ぶ機会を作っていくしかない限り、死に臨む準備や心構えが醸成されることは困難である。

一方、枝葉といべき終活に関する情報が過度に流布するのも現代の特徴と言える。枝葉末節の情報に翻弄されないためにも、自らの死生観というしっかりした軸を確立していくことが重要であり、その軸を養う最も良い方法こそ、私たち日本人が長年培ってきた「供養」という営みであると考える。

また、供養と聞くと、生きている自分たちにどんな意義・効用があるのか分からぬと思う方も多いいらっしゃるだろう。供養は決して死者のためだけではなく、むしろ生きている人たちの幸せにつながるものだ。本来の供養とは、死者とのつながりを縁として、自らの生き方を振り返って見つめ直し、自らを超えた命への感謝が育まれ、結果として幸せを感じやすい心に成長していく営みである。

終活を意識して供養を大切にすることは、家族にルーツ(先祖)や自身の死後について自然と思いを馳せさせるとともに、自身の歩み・生き方の振り返りを促し、老いや病気とも向き合いながら、残された人生の日々をどのように有意義に過ごしていくかを見つめなおす好機となる。

加速度的な現代社会の変化とともに供養の形は変わっていたとしても、大切な人を供養したいという気持ちは残り続ける。伝統的な供養の形が大きく変容し供養の自由化が進む中、私たちが迷うことなく「しっかりと供養できた」という安心感を得るためにも、どうぞ遠慮なく超覚寺までご相談ください。